

## 自由論題報告 H

### H-1 東アジア

〈座長〉野村 茂治 (大阪大学)

1) Comparative Study regarding Population Aging in China and Japan

……………楊 非凡・聶 海松 (東京農工大学)

2) 中国の新人口政策と「国家人口発展計画」について ……………尹 豪 (福岡女子大学)

3) 台湾における母親の就業と保育サービス利用 ……………可部 繁三郎 (日本経済新聞社)

### H-2 地域人口分析

〈座長〉高橋 眞一 (新潟産業大学)

1) 多変数による組み合わせ分析法の提案 ……………井上 希 (青山学院大学)

2) 近年の地域別人口性比の動向 ……………坂井 博通 (埼玉県立大学)

3) Discovery of Small Area Population through Web Demographics

……………T. Edwin Chow (Texas State University)

(鈴木 透 記)

## マックスプランク出張報告

6月12日から23日まで、ドイツ・ロストックにあるマックスプランク人口研究所 (Max Planck Institute for Demographic Research) に滞在する機会を得た。滞在の目的は、科学研究費助成事業「結婚・離婚・再婚の動向と日本社会の変容に関する包括的研究」(代表者：岩澤美帆)の一環として、これまで内外の研究者と共に取り組んできた結婚研究の成果を報告してフィードバックを得ることと、同時期に開催されていた International Advanced Studies in Demography (IDEM) という人口学の研修コースに参加することであった。筆者は同研究所に2008年4月から2011年9月まで勤務しており、今回6年ぶりに古巣を再訪することとなった。

マックスプランク人口研究所は、1996年に開設された国際的な人口研究機関である。開設以来、世界中から研究者が集まり、人口変動、高齢化、出生力、生物人口学、その他の最先端の人口研究を行ってきた。同研究所はヨーロッパでも有数の人口研究機関であり、世界の人口研究を主導する研究所のひとつとして名声を確立している。マックスプランク人口研究所は、最先端の研究を行うのみならず、次世代の人口研究を担う若手研究者の育成にも熱心な取り組みをみせている。IDEMは、同研究所が主催する人口学の研修コースのひとつであり、第一線の研究者を講師に迎えて博士課程の学生や若手研究者に人口研究における最先端の知識やスキルを伝えている。

今回の滞在では、IDEMの一環として、「人口データの平滑化：人口研究における柔軟なモデル (Smoothing Demographic Data: Flexible Models in Population Studies)」および「データの視覚化 (Visualizing Data)」の2つのコースを受講した。いずれのコースも、月曜日から金曜日までの5日間の連続講義で、午前中は座学による講義、午後はRを用いた実習の形式で行われた。各コースとも受講生はPhDの学生やポスドクが中心であったが、筆者のような中堅やシニアの研究者も数名参加しており、様々な年齢、キャリア、出身国の受講者同士、交流を深めることができた。今回久しぶりにコースワークを行なった感想として、人口学におけるRの普及が挙げられる。両コース共に利用する統計パッケージがRであったことから明らかなように、近年ヨーロッパの人口学研究においてはRが主流となりつつあるようである。Rの特徴としては、プログラムの柔軟性、コマンドやオプションの豊富さ、そして精細かつ柔軟なグラフィックの作成が挙げられる。今回の研修を経て、

Rで実行可能な様々なパッケージとそのコードについて知ることができたのは収穫であった。両コースともシラバスがネット上に公開されているので、興味ある読者は参照されたい。IDEMのコースワークは随時更新され、受講者を一般公募しているので、スキル向上を目指す大学院生や若手研究者は機会があれば応募してみるのも一案である。

また、滞在中、筆者は“The global trends in narrowing/reversing educational differentials in marriage in developed countries: Theoretical explanations and consequences in East Asia”という報告を行った。同研究所における人口研究は欧米を中心としたものであり、アジアの人口問題、とりわけ結婚への関心はそれほど高くない印象であったが、折しも大規模データセットを使った出生の社会経済格差に関するプロジェクトを立ち上げる計画があるとのことで、そちらのプロジェクトとの連携可能性などについて話し合うことができた。

マックスプランク人口研究所では、設立以来 Director を務めてきた Jim Vaupel 教授の年内引退に伴い、新しい Director の人選が始まっているとのことであった。2015年より Executive director に就任した Mikko Myrskylä 教授と並ぶもうひとりの Director が誰となるのかが大きな関心事となっていた。マックスプランクでは Director の交代に伴って研究員も大きく入れ替わることから、新しい Director の下で今後、同研究所における人口研究がどのような発展を見せるのか注目が集まるところである。

(福田節也 記)

## 高齢者問題に関するマドリッド国際行動計画 第三回地域評価準備専門家会合

2017年6月14日(水)～15日(木)、タイ・バンコクの国連アジア太平洋経済社会委員会(ESCAP)で標記会合が行われ、筆者が参加した。国連は2002年にマドリッドで第2回高齢者問題世界会議を開催し、「高齢者問題に関するマドリッド国際行動計画」が採択されたが、その後5年ごとに評価を行うこととなっており、今年2017年は3回目の評価年にあたる。政府間会議は9月中旬に予定されており、本会合はその準備会合である。

参加したのは ESCAP 加盟各国の政府代表および専門家であり、HelpAge International や Agewell Foundation といった高齢化分野の国際 NGO、また WHO や ILO、国連人権高等弁務官事務所(OHCHR)といった国連機関の担当者などが参加した。アジア・太平洋地域における人口高齢化の現状と課題に関する横断的な報告や、各国の高齢化に対する取り組みに関する報告の後、今後の方向性と優先的に取り組む課題に関する提案文書がまとめられた。

人口高齢化は、東アジアから東南アジアへと問題意識と具体的な施策が広がっているところであるが、さらに本会合では南アジア圏においても関心が高まりつつある様子が伺われた。インド、バングラデシュにおいては問題提起の段階であったが、スリランカでは介護人材の育成など具体的な施策が進められているようであった。また、人口高齢化は保健・介護という側面だけではなく、すでに中南米、アフリカで高齢者の人権規約が採択されているように、「人権」の切り口が重要であること、また「参加(participation)」というキーワードで施策を作る必要があることなど、人口高齢化対策の多面性が示された。会合の内容・資料は

<http://www.unescap.org/events/preparatory-regional-expert-meeting-third-regional-review-madrid-international-plan-action> から閲覧・ダウンロード可能である。

(林 玲子 記)